地生態系の中に仕立てられた平地林に求める以外にはなかったのである。

どこの農家でもケヤキ（欅）などの屋敷森と、生け垣に囲まれて家が建てられている。農家の庭は、農産物の脱穀、穀物の干し場など、農作業場の広場として使われていた。冬、そのままにしておくと霜柱が立ち、この庭も昼間ぐちゃぐちゃにぬかるんでしまう。麦の棒打ちをはじめ農家の庭は農作業をする場にもなるので、ぬかるまないように大切にした。ここに落ち葉を敷き詰めておくと、霜柱が立たないだけでなく、落ち葉の上を歩くとガサッゴソッと音がして、夜間の防犯上も都合が良かったという。庭に敷き詰めた落ち葉も無駄にすることなく、春の彼岸頃には再びかき集められ、堆肥置き場に積み込まれて堆肥となった。

萌芽更新と農用林

落ち葉の採取が終わると、伐り時になった林を伐る作業にとりかかる。クヌギやコナラは二五年以上も経つと樹勢が弱くなってくるので、農民は定期的に林を伐って更新させながら薪を採取していた。木を伐ると切り株から新しい萌芽枝をだして、そのまま生長していく樹種がある。数年後に伸びて込み合ってきた孫生の中から曲がったものや生育の悪いものを切って、数を二、三本に減らす「もやかき」という作業を行う。新しく植林する必要がない上に、元の木の根は大きく張ったままなので、この芽は育つのが早い。これを利用した林の再生は萌芽更

3-7　萌芽更新された林（左）と「もやかき」（右）　**【口絵❺参照】**

新と呼ばれ、萌芽力の強いクヌギやコナラは、簡単に林の更新ができた。しかし萌芽更新をさせるためには、いつ伐木してもよいわけではない。伐ってよい時期は、樹木の生長休止期に入る一一月から翌年の二月下旬までで、三月に入ってから伐ると樹木の萌芽力が低下するので、必ずそれまでに終えなければならない。

伐木する時期は林地の地形や土壌などによって多少異なるが、おおよそ一五～二〇年周期が一般的であった。しかし中には土壌の条件が良くて、わずか七年ぐらいで伐れるほど生長の早いヤマもある。このような林は七五三の「帯解（おびとき）の祝い」になぞらえて「帯解ヤマ」と呼ばれていた。

萌芽更新によって再生した林はちょっと見ただけで、すぐにそれとわかる。つまり、根元からまっすぐ一本の幹で立っているものは少なく、根元で数本がくっつき合ったり、ときにはそれが輪生したりして株立ちしているからだ。また、萌芽更新をしていた頃は林内に巨木は

なく、木の太さも高さも揃っていた。定期的に伐っていた頃の平地林なら、樹高も高くてもせいぜい10ｍぐらいであった。ただし、アカマツは萌芽力が弱くて「一代限り」なので、根元から樹冠まで一本の幹が通っている。アカマツを伐る時にまっすぐ伸びた姿のよいものは、伐らずに母樹として10ａ当たり一〇本前後残して、天然下種更新を行った。

前述したように萌芽更新を止めてしまえば、やがては自然の遷移により極相の常緑広葉樹林へと戻ってしまう。落葉広葉樹林を永続的に維持し、農用林としての利用を続けるためには、森林が極相の常緑広葉樹に遷移するのを何としても防がなければならない。すなわち、下刈り、落ち葉掃き、萌芽更新といった人為的作業によって植生の偏向遷移をさせて、三富新田の落葉広葉樹林の平地林が維持されてきたのである（3-5の図、3-5-1、3-5-2の写真参照）。

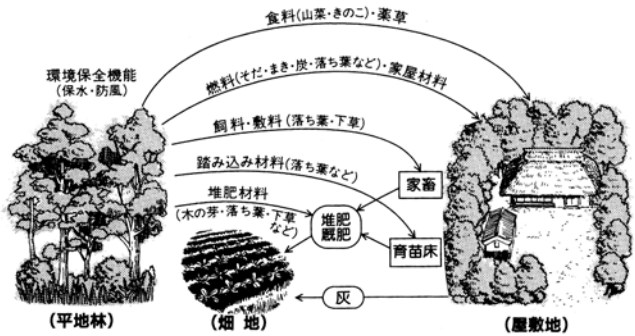
一九六〇年代中頃になると「燃料革命」が全国的に進行し、薪炭材の需要がなくなって農村にまで石油やプロパンガスなどが普及してくると、樹高が以前と比べるとずいぶん高くなった。人間社会だけでなく、平地林にも高齢化の波が押し寄せてきている。さまざまな動植物が生きていくためには、若い林も中年の林も年老いた林も、それぞれ適当な割合で存在する形が理想である。このまま平地林の樹木が利用されず萌芽更新もされない状況が続いていけば、やがて年老いた林ばかりになり、生物の多様性も保持できなくなってしまう。

農民が平地林を必要としたのは、落ち葉堆肥のためだけではない。平地林から燃料になる薪や粗朶（そだ）、家屋や納屋の補修材、屋根葺材料のカヤなどが入手できたし、食料用のカタクリ、ワ

ラビなどの山菜やキノコ、センブリやイカリソウなどの薬草なども採れた。また、燃料になる薪や粗朶なども得ていた。薪を採取するために一五～二〇年周期で平地林を伐採し、「萌芽更新」

3-8　平地林からの賜物

カヤ葺き屋根、軒下の薪、苗床、採取した落ち葉、こうした様子は1970年代中頃までみられた　**【口絵❸参照】**



3-9　農用林（模式図）　　犬井（1996）による

によって容易に平地林を再生した。

そのほか、屋根葺材料のススキなどのカヤも入手でき、食料になるキノコや野草も採れた。つまり、平地林は農業の再生産や、農家の生活を維持するための林野で、農用林と呼ばれている。建築用材の生産を主目的としている育林地帯のスギやヒノキの常緑針葉樹の山林とは、樹種も役割も異なっている。関東平野の平地林は大部分がクヌギ・コナラ林や、アカマツ林を主体とした農用林である。また、短冊型地割の最後部に配された平地林は、隣家の林と連なり冬の空っ風から集落全体の畑地の土や屋敷を護るとともに、台地や丘陵に降った雨を直ちに流し去らないようにする保水機能も果たしていた。さらに、集落の周りには伐採されたばかりの林や、生育の段階の途中にある林などがモザイク状に存在していたので、さまざまな種の動植物たちが生息する事が可能なため、生物多様性が巧まずして保持されてきた。第二次世界大戦前までの関東平野の台地や丘陵上の畑作地帯では、分家を出す場合や小作地には、畑地と平地林を必ずセットにする慣行があった。戦後の農地改革の時ですら、平地林は農地解放の対象にはならなかったのに、地主から畑地と一緒に平地林の解放も勝ち取ったところが少なくない。こうした事実をみても、この地域の農民にとって平地林がいかに重要な生産手段であったのかを理解することができる。里山としての平地林の利用方法や利用形態は、まさに関東平野の台地に生きる畑作農民の知の体系である。現在、私たちが見ている三富地域の平地林の多くは、各戸で耕地生態系の中に里山を取り込んだもので、短冊型地割の最後部に配された平地林が連なったも

のであり、自然に形成されたものではない。

平地林、雑木林、里山

関東平野の約六割を占める洪積台地には、畑地と結びついた平地林がみられる。農民はこの平地林を「ヤマ」と呼び、けして「雑木林（ぞうきばやし）」などとはいわない。徳富蘆花（とくとみろか）の『自然と人生』の雑木林や、国木田独歩の『武蔵野』の落葉林（おちばりん）のように、自然主義文学者の文芸作品の中で、武蔵野の平地林のある美しい田園風景が生き生きと描写された。すなわち、武蔵野のクヌギ・コナラからなる平地林を、雑木林や落葉林として新たに風景価値を評価したのは、日本の産業革命期にあたる二〇世紀初頭の自然主義文学者であった。確かに雑木林に冠された「雑」の字は雑種、雑用、雑役、雑魚（ざこ）などと同様に、武蔵野の農民が平地林に対して抱いている農用林としての「重要・不可欠」という感覚とは程遠い感じを与えることは否めない。農民ではなくいわば傍観者として美しい平地林を見た文学者も、おそらく平地林が農民にとって農家生活や、農業生産に密接に結びついた農用林であるという理解にまでは達することなく、「雑木林」という語を用いてしまったのであろう。私自身、一年中、姿形を大きく変えず凛としてそびえ立ったスギやヒノキなどの針葉樹林よりも、春の新緑、夏の緑陰、秋の紅葉、冬の落葉と四季折々趣のある姿をみせてくれる落葉広葉樹林の方に親しみを感じるのは確かである。